II期

遺　構

ＳＢ01（図版６）　一辺 335cmの方形プラン。床面直上には炭化物が薄く堆積していた。掘形は深さ約10cm残存。SD03に切られる。

ＳＢ02（図版６）　一辺 505cmを測る。床面の確認ができたにとどまる。掘形は深さ約10cm 残存。覆土からは若干土器片が出土したにとどまる。

ＳＢ03（図版６）　規模は不明。一辺 350cmを測る方形プラン。掘形は深さ約10cm 残存。周溝や柱穴は検出できていない。

ＳＢ04（図版７）　一辺約 360cmを測る方形プラン。掘形は深さ約20cm が残存。主柱穴を１ケ検出したにとどまる。

ＳＢ06（図版８）　SB07を切る。方形プランだが、規模は不明。周溝がめぐる。掘形は深さ約20cm残存。

ＳＢ07（図版８）　SB06に切られる。方形プランを呈する。

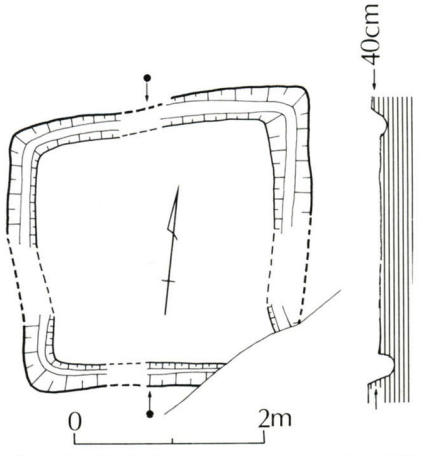
ＳＢ08（図版８）　長軸320cm、短軸 300cmを測る小形の方形プラン。柱穴は未検出である。掘形は深さ約 15cm残存。周溝が全周する。

ＳＢ09（図版８）　方形プランだが、規模は不明。SB10に切られる。掘形は深さ約 10cm残存。

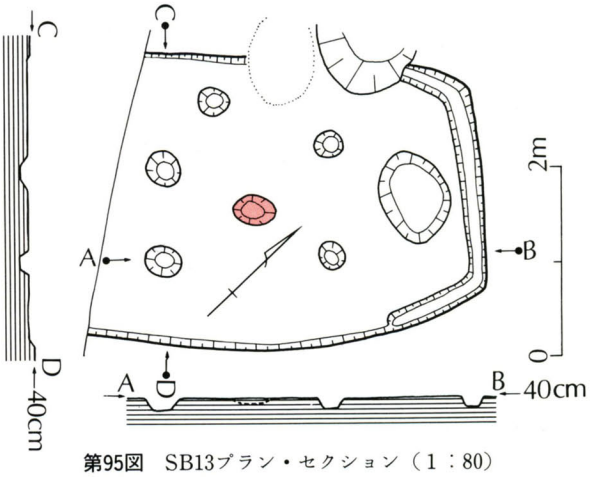
ＳＢ10（図版８）　周溝のみの検出にとどまる。方形プラン。

ＳＢ12（図版９）　プランは楕円形をなし、長軸415cm、単軸 325cmぐらい。掘形は深さ約 10cm残存。床面直上には多量の土器が遺棄されていた。痕跡程度に焼土面が認められた。

ＳＢ13（図版９）　プランは胴張りの長方形である。長軸400 cm以上、単軸は 300cmを測る。掘形はほとんど残存せず。主柱穴は４ケで、中央ピットは炉である。床面直上には細頸壷が潰れた状態で遺存していた。



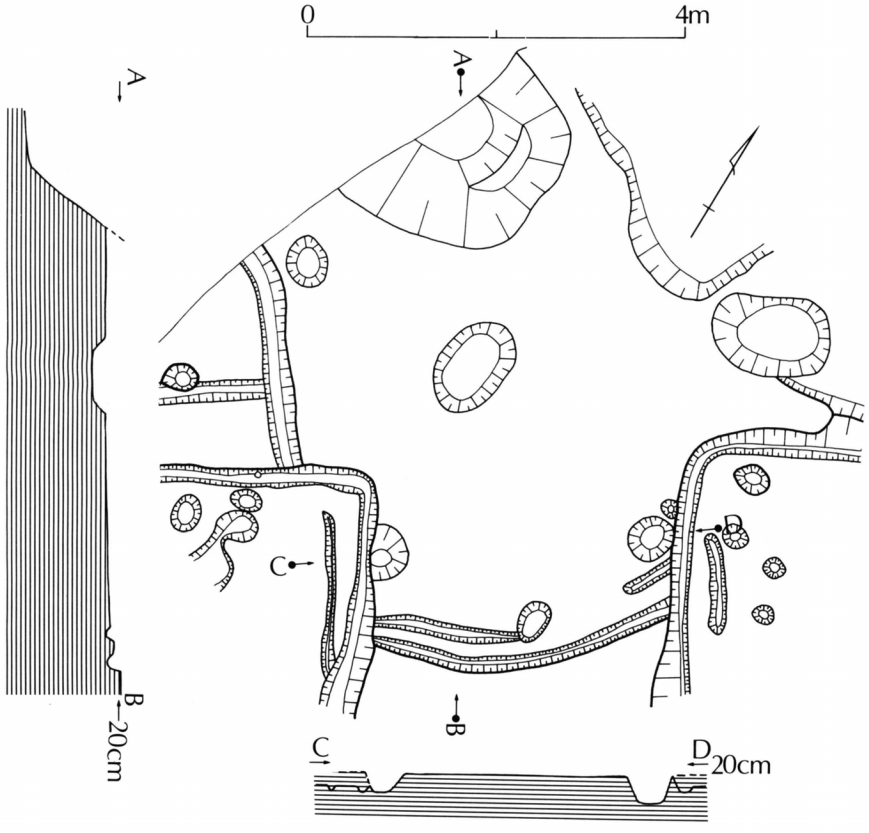
第94図　SB08プラン・セクション（１：80）



第95図　SB13プラン・セクション（１：80）

ＳＢ14
(図版９)　一辺 440cm を測る方形プラン。床面には炭化物が薄く認められた。土器は床面から浮いて出土した。

ＳＢ18
(図版９)　プランは径約 650cm の円形である。主柱穴は３ケ検出した。中央ピットは焼土面を形成しないので炉とするには問題がある。南部では周溝が２条となっており、拡張の行われたことを示す。下層はわりとまとまった土器の出土をみたが、上層には細片を中心とした集中廃棄があった。



第96図　SB18プラン・セクション（１：80）

ＳＢ20
(図版６・10)　SZ01（SD05）に切られる。プランはやや胴張りの長方形で、短軸 475cmを測る。掘形は深さ約10cm 残存。

ＳＢ21
(図版10)　プランは450cm×425cm の不整円形をなす。掘形は深さ約20cm 残存。主柱穴は４ケ検出した。

ＳＢ22
(図版10)　一辺350cm を測る方形プラン。掘形は深さ約 10cm残存。両コーナーに柱穴状のピットがあるが浅い。

ＳＢ23
(図版10)　方形プランだが、部分の検出で規模は不明。掘形は深さ約５cm 残存。

ＳＢ24
(図版10)　方形プラン。周溝のみの検出にとどまる。規模は不明。

ＳＢ25
（図版10・11）

２回拡張が行われる。

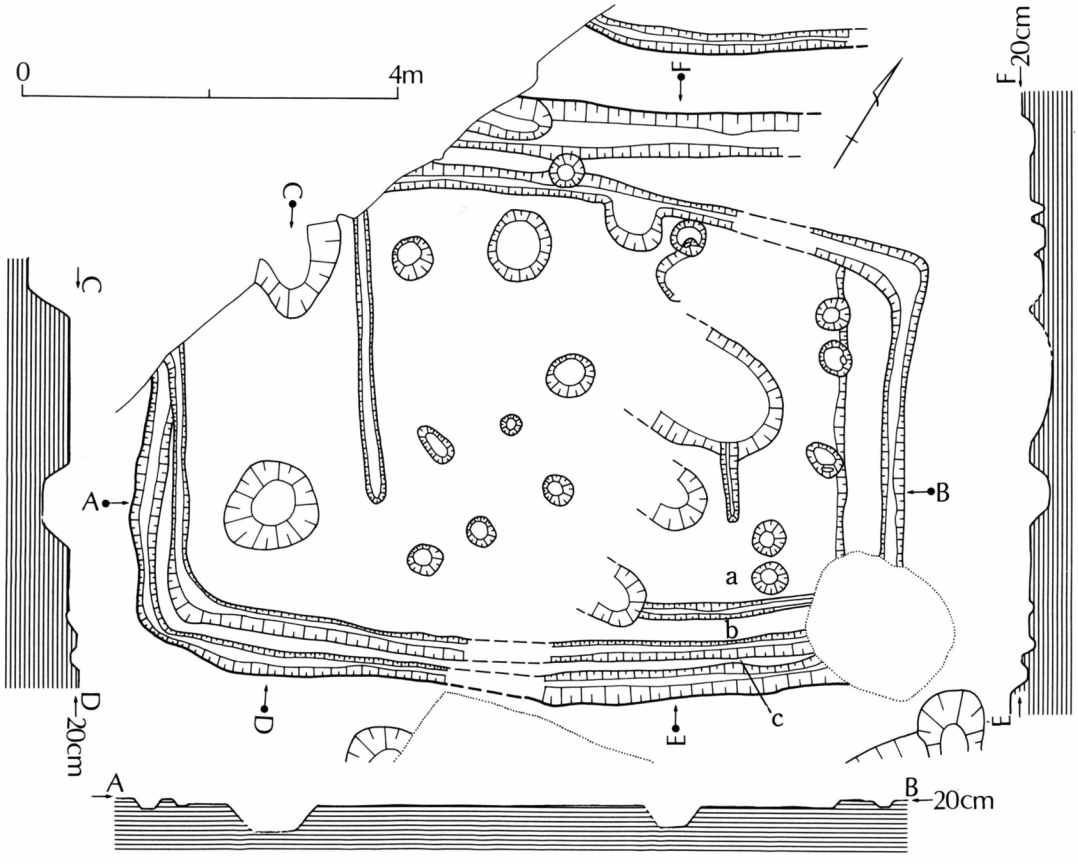
ａは長軸500cm、短軸 450cmを測る西辺の長い台形気味の長方形プランである。北東短辺には周溝はめぐらない。

ｂはａの大幅な拡張（建て替え）で長軸770cm、短軸520cm を測るやや胴張りの長方形プランとなる。

ｃは南東長辺から南西短辺にかけて 40cmほど拡張するだけである。

掘形は深さ約 20cm残存。

本住居の時期はII期としたが、上層にはIII期の土器を含む包含層があり、北西辺北側の幅広い周溝はそれに伴うものかもしれない。



第97図　SB25プラン・セクション（１：80）

ＳＢ26
(図版10)

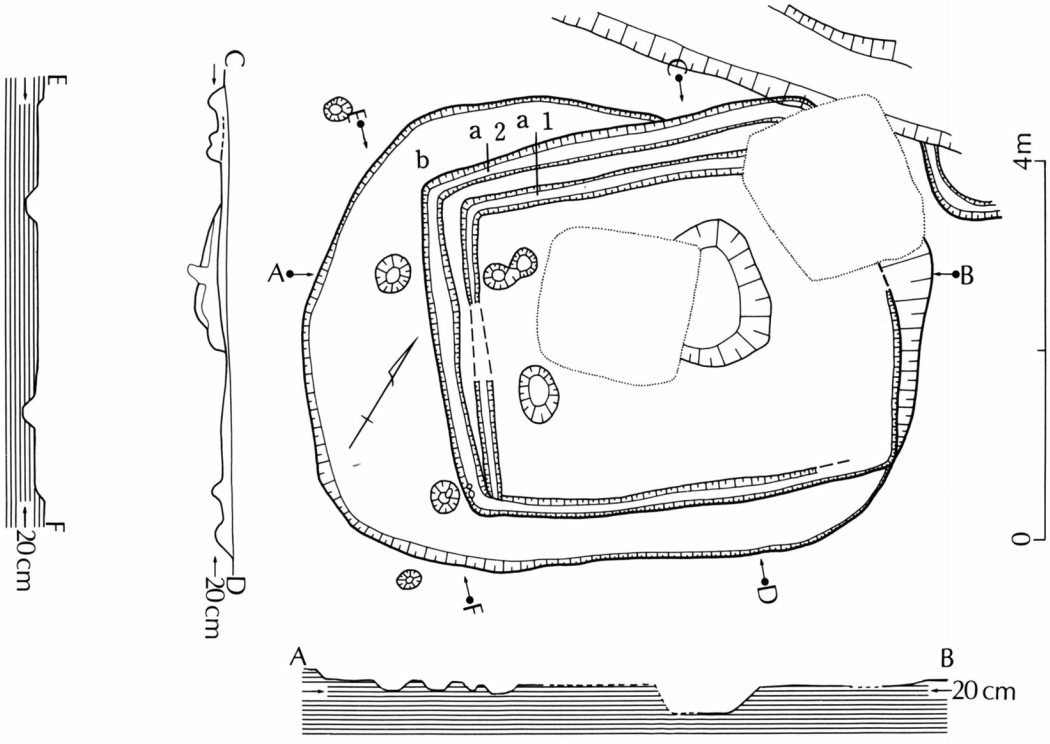
方形プラン。周溝のみの検出にとどまる。規模は不明。

ＳＢ32
(図版11)

拡張（建て替え）というよりは、２つの住居跡が重複していると見たほうが良いかもしれない。

ａは内側の周溝をａ１、外側の周溝をａ２とする。ａ１は長軸440cm、短軸350cm、を測る長方形プランを呈する。ａ２は長軸480cm、短軸400cmを測る北東短辺のやや長い長方形プランを呈する。掘形は深さ約5cm残存。

ｂは、胴張りの隅円長方形で、南西短辺の張り出しが強い。長軸660cm、短軸490cmを測る。掘形は深さ約15cm残存。柱穴は２ケ検出した。周溝は土層セクションでは確認できた。



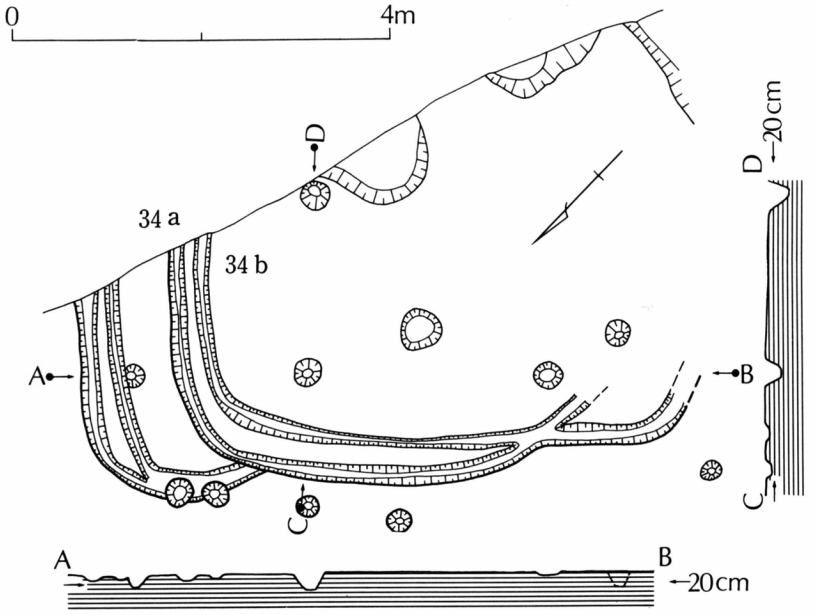
第98図　SB32プラン・セクション土層セクション（１：80）

ＳＢ33
(図版11)

SB32bよりも不整形なプランを呈する。床面直上や覆土から多量の土器が出土した。土器の廃棄に惑わされて、床面や柱穴、周溝の検出が十分にできなかった。掘形は深さ約10cm残存。

ＳＢ34ａ
34ｂ
(図版11)

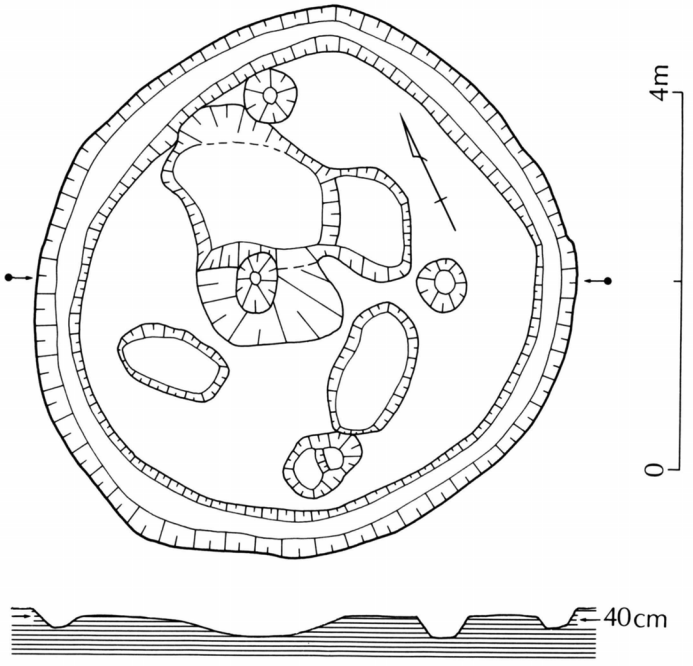
周溝のみの検出であり掘形は残存せず。周溝の切り合いは34aが拡張を示すようであるが、34bは北部で周溝がうまく平行しているけれども、南部では交差して拡張の状況ではない。異なる住居が偶然重複したのかもしれない。出土土器はなく、包含層の状態から時期を推定した。



第99図　SB34ａ・ｂプラン・セクション（１：80）

ＳＢ36
(図版11)

プランは不整円形で、直径は590cmを測る。周溝は幅40cmと広く、また深い。掘形は深さ約10cm残存。主柱穴は３ヶ検出したが並びは悪い。床面で検出した土坑には炭化物が多量に詰まっており、水洗選別をした結果炭化米が多量に出土した。



第100図　SB36プラン・セクション（１：80）

ＳＢ37
(図版11)

長軸540cm、短軸350cmを測る隅円長方形プランを呈する。周溝は全周しない。柱穴などは不明。掘形は深さ約10cm残存。

ＳＢ38
(図版11)

北辺のやや長い台形気味の隅円方形プランを呈する。中軸線で430cmを測る。周溝が一部残存。掘形は深さ約10cm残存。

ＳＢ58
(図版14)

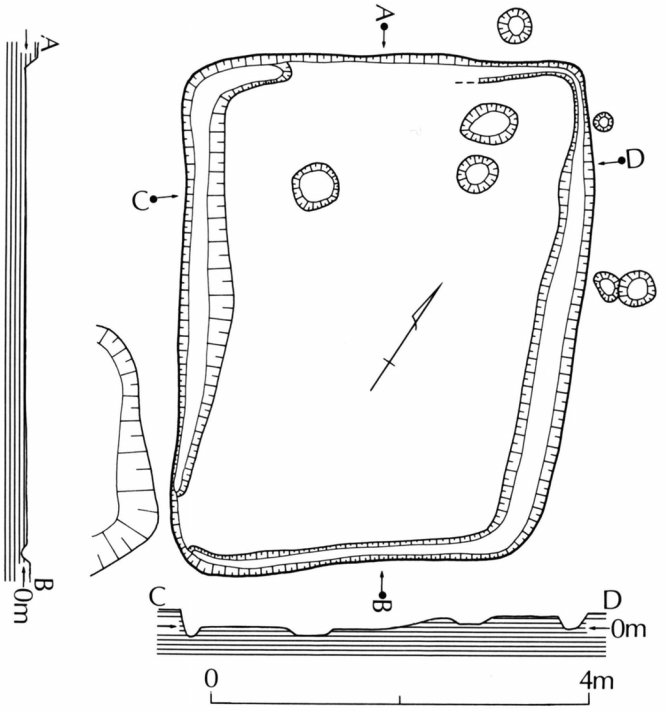
長軸530cm、短軸425cmを測るやや歪んだ長方形プランを呈する。掘形は深さ約20cm残存。床面は東から西へ少し下降しており、全くの平坦というわけではない。周溝は断続しながらめぐる。北東短辺側でピットを２ヶ検出したが、どちらも浅く主柱穴とはいえない。

ＳＢ60
(図版14)

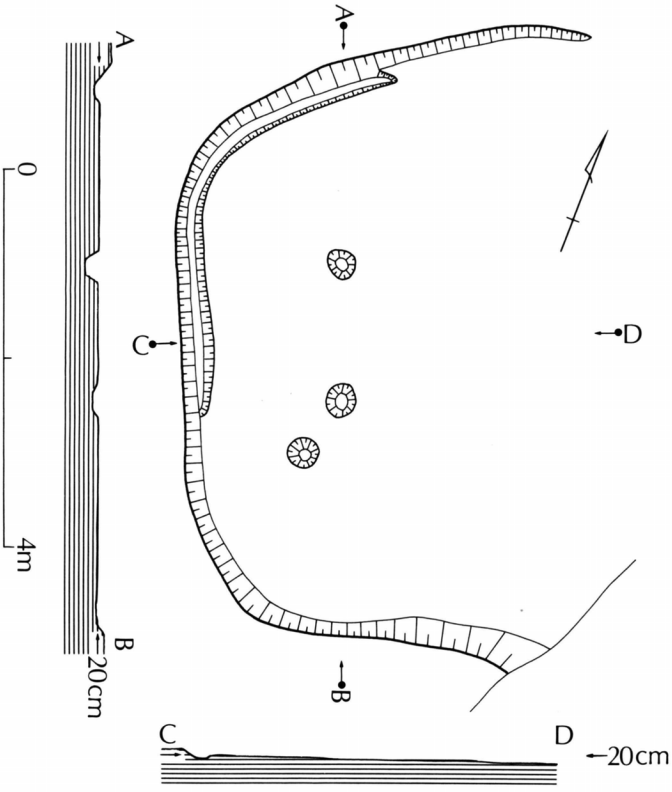
薄い炭化物層を追及した結果としての掘形の検出であった。深さ約10cm残存。規模は不明。

ＳＢ61
(図版15)

東半分は現代の攪乱（畑の土取りか）によって削平されたため検出できなかったので全体は不明だが、残存部で一辺620cmを測る。床面直上には土器が幾つか遺棄されていた。周溝が一部に検出できたが、ピットは浅く柱穴かどうか不明。



第101図　SB58プラン・セクション（１：80）



第102図　SB61プラン・セクション（１：80）

ＳＢ63
(図版15)　SB62に切られる。プランは不明。周溝のみの検出にとどまっており、掘形は残存してない。

ＳＢ65
(図版15)　周溝のみの検出にとどまっており、掘形は残存していない。胴張りの隅円長方形プランを呈し、長軸650cm、短軸 435cmを測る。

ＳＢ67
(図版17)　一辺 580cmを測る方形プランを呈する。掘形は深さ約 10cm残存。床面直上には土器が遺棄されていた。

ＳＢ68
(図版18)　部分の検出で、プランは不明。掘形は深さ約10cm 残存。

ＳＢ69
(図版18)　プランは不整形。掘形は深さ約10cm 残存。

ＳＢ71
(図版19)　プランは円形を呈し、直径800cmぐらいの規模である。床面は遺棄された土器群や炭化物の追跡から把握できたけれども、周壁・周溝は土層セクションでの確認にとどまった。柱穴は検出できなかった。

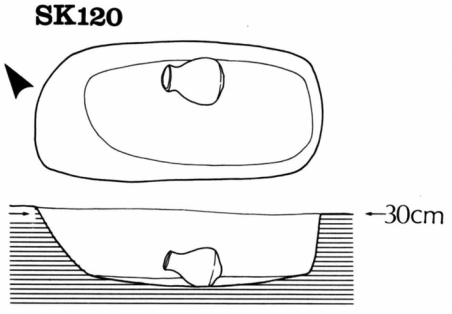
ＳＤ09
(図版10)　SB22に近接して存在する。長さ 500cm以上、幅は140cm、深さは約30cm。II期の特徴を示す良好な土器群が出土した。性格などは不明である。

ＳＫ03
(図版６)　II期で唯１点の円窓付壷が出土した土坑。

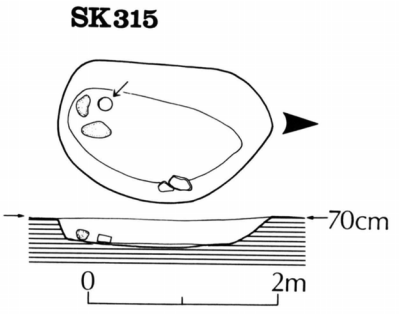
ＳＫ120
(図版11)　長軸130cm、短軸80cm、深さ 40cmの箱形を呈する土坑で、底面に接して口縁部を意図的に打ち欠いた壷が横になって出土した。埋土は単一層で、とくに埋められたというような形跡は認められなかった。

ＳＫ315
(図版17)　上面に線刻の施された脚状土製品が棒状礫とともに、本土坑の南端壁寄りに据え置かれた状態で出土した。

土坑は長軸約115cm、短軸約70cm で、深さ約15cm を測る。底面のほぼ平坦な形状を呈する。



第103図　SK120土器出土状態

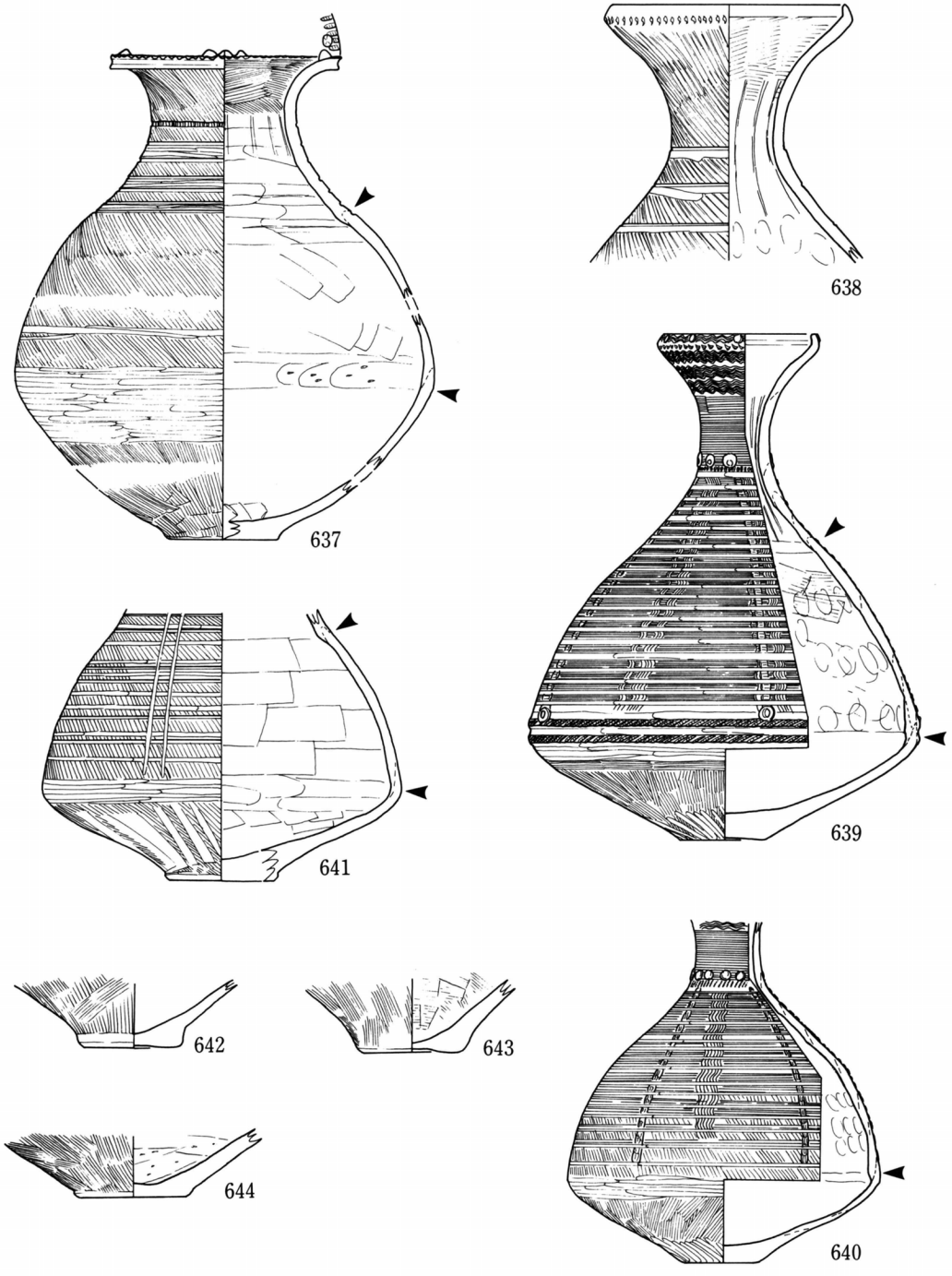


第104図　SK315土製品出土状態

遺　物

土器

ＳＢ12　637は口縁部内面に３ヶ１単位の瘤状突起が円周４分割の位置に施され、外周にハケメ工具による刻みを施す。体部は成形第１段階接合面がかなり上方にあって球形化している。施紋は磨消ハケメ帯がかなり上方に圧縮されている。

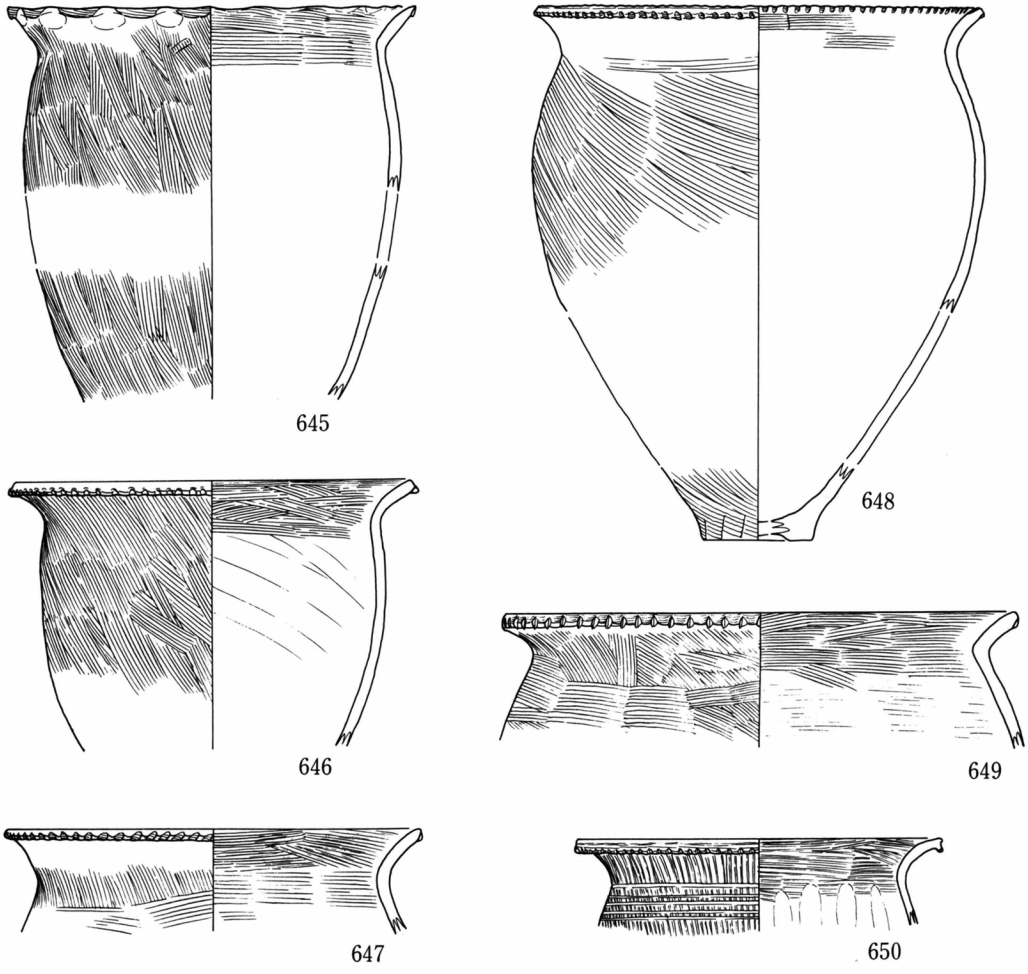


第105図　SB12出土土器　(1)

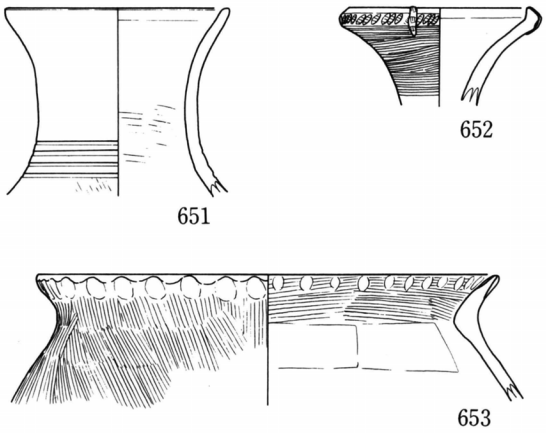
638～641は細頸壷 Aa。638は施紋が磨消ハケメ帯よりさらに省略的で沈線に磨消線を平行させているだけである。粗いハケメが特徴的である。639は櫛描紋 *f* 類で細密な紋様構成を特徴とする。黒色仕上げ。640は紋様構成は639と同じであるけれども、黒色仕上げではない。639・640の施紋で特徴的なのは、Ⅰ期には円形浮紋列や棒状浮紋列であったのが、ここでは粘土紐垂下となっている点である。表現を大きく変更しない範囲での手法上の簡略化である。641は沈線→磨消線→縦位磨消線という施紋順序である。壷底部642・643はやや上げ底を呈する。

645は甕 Af(指頭圧痕紋系)である。646～649は口唇部の刻み方や体部上半のハケメ調整が断続ではあるが650のような甕Dと共通しており、純粋に固有器種とはいいがたい。648は口唇部上下端にハケメ工具による刻みが施されるだけでなく、底部もドーナツ状上げ底になっている。

650は甕D。口唇部が垂下し、粗いハケメが施されている。胎土にも金雲母が多量に含まれており、明らかに伊勢湾西岸部からの搬入品である。Ⅱ－1期。



第106図　SB12出土土器 (2)



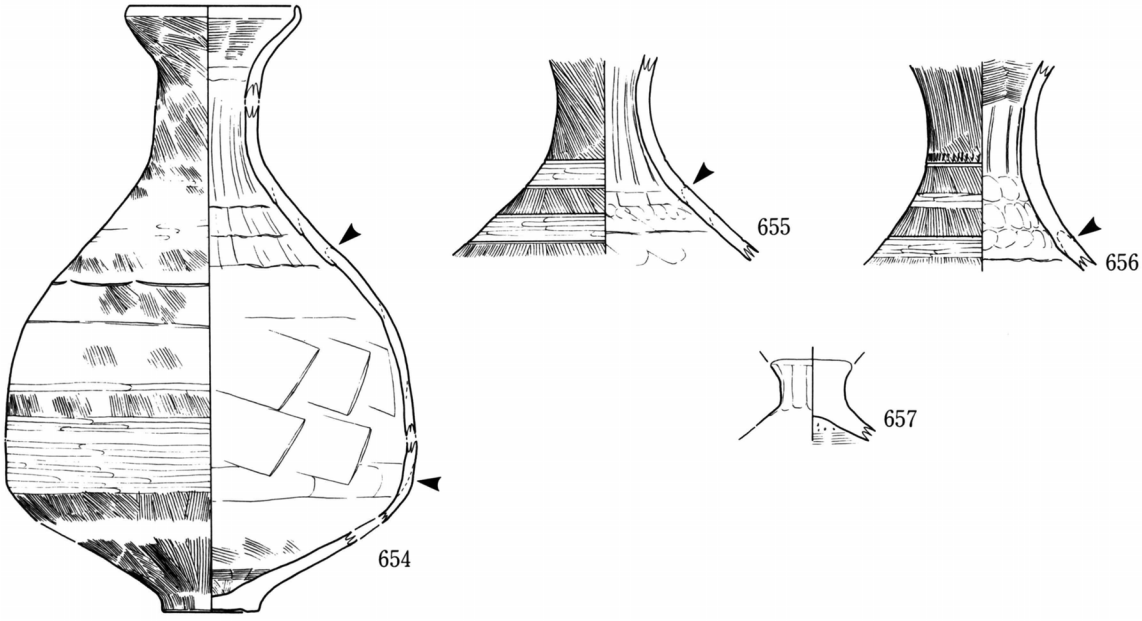
第107図　SB14出土土器

ＳＢ14　651は頸部に沈線を４条施す。口縁部はやや内傾する。円窓付壷かもしれない。652は細頸壷 Aa。口縁部の櫛描紋は脱落している。653は甕 Af。

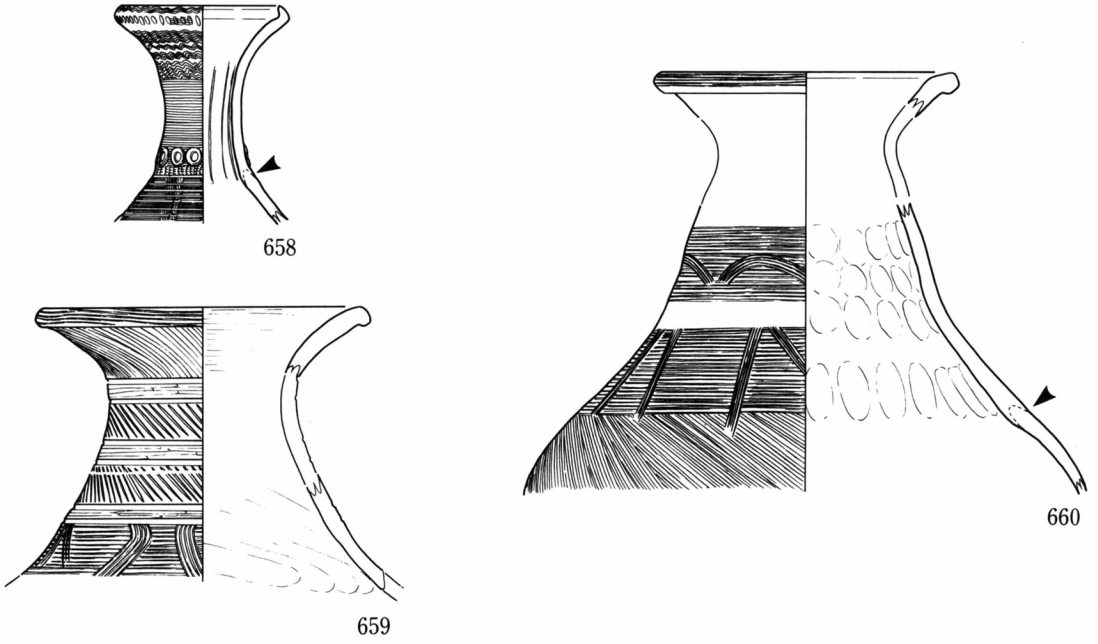
ＳＢ18　上層と下層に分かれる。

上層　細頸壷 Aa のハケメ磨消帯系３点（654～656）と蓋？が１点ある。他は小片ばかりである。

654はハケメ磨消帯構成がくずれている。沈線は整った連続性はみせず、断続的である。磨消帯も整った構成をなさず、磨消線紋との中間的な紋様構成となっている。底部はドーナツ状上げ底である。655はハケメ磨消帯。656は付加沈線が脱落している。II－２期に属す。



第108図　SB18出土土器 (1)



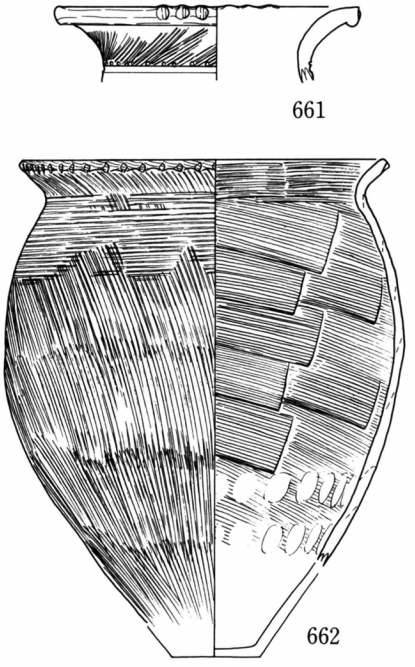
第109図　SB18出土土器 (2)

下層　658は細頸壷 Aa。櫛描紋 *f* の典型である。体部の縦位施紋には波状紋と粘土紐垂下が施されている。

659はB系統壷である。頸部には斜位沈線と組み合わせた付加沈線磨消帯が施されている。櫛描紋帯には縦位弧線が施される。櫛II種 b 類。660もB系統壷。櫛描紋は櫛II種A類による。体部も同様の原体による調整を施す。頸部上位の櫛描紋帯と櫛描連弧紋の組み合わせは、沈線連弧紋を櫛描紋に置き換えた手法であり古い様相である。II－1期。

SB20　661はB系統壷の口頸部である。口唇部には3ヶ1対の部分圧痕が円周4分割の位置に施される。頸部外面は櫛II種A類による条痕風の施紋がある。頸部沈線の直上には刺突紋が施される。黒色仕上げ。

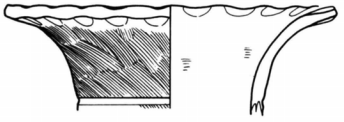
662は甕D。体部上半にハケメ工具による直線紋が施される。



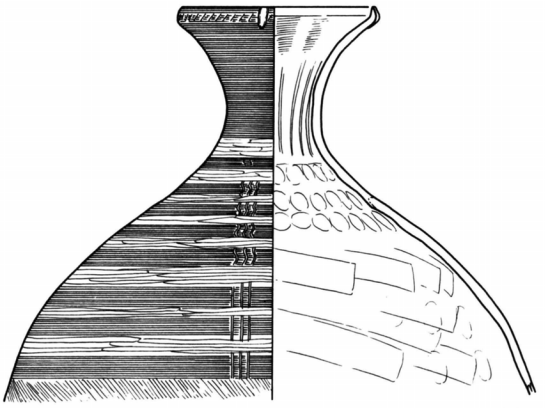
第110図　SB20出土土器

ＳＢ21　663は太頸壷Ａ指頭圧痕紋系の典型。口縁部は無紋で頸部に沈線が施される。

664は細頸壷 Aa。口縁部屈曲部の刻みは鋭い切り込みである。体部紋様は櫛描紋 *e* 類で、櫛描直線紋→櫛III種（2・2・2）による縦位波状紋（下部は直線紋になる）→研磨という順序で施される。付加沈線は脱落している。II－1期。



663



664

第111図　SB21出土土器

ＳＢ32　土器群は上層と下層に分かれ、上層はさらに2群に分かれる。

上層第1群　671・672の2点である。時期はIII期に属す。偶然同一面で検出しただけで本来は別遺構に伴うものかもしれない。

上層第2群　665～669の5点である。665•666は「く」字状に外反する口縁部をもち、665は口唇部上端が微妙に立ち上がる。

667は大形台付甕Ａである。体部と脚台の大きさがアンバランスである。赤桃色を呈するので、ススの付着はないが火熱を受けているかもしれない。668は底部に木の葉痕を残す甕底部である。

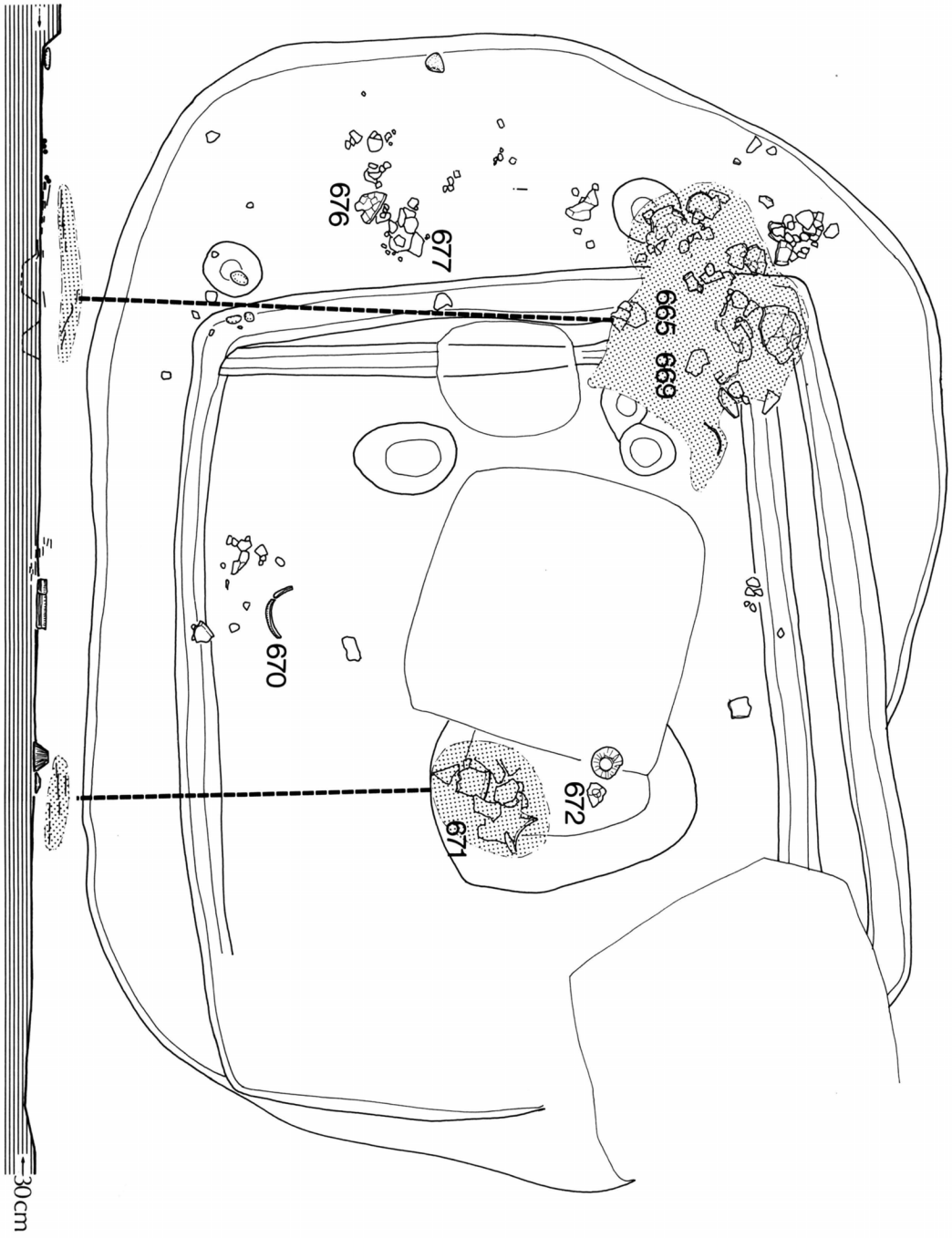
677は体部外面にカゴ目状の磨消線（暗紋）を施す壷である。

下層　ほぼ床面直上からの出土である。670は受口状口縁甕である。口縁部外面にハケメ工具の刻み、頸部直下には櫛描直線紋が施される。

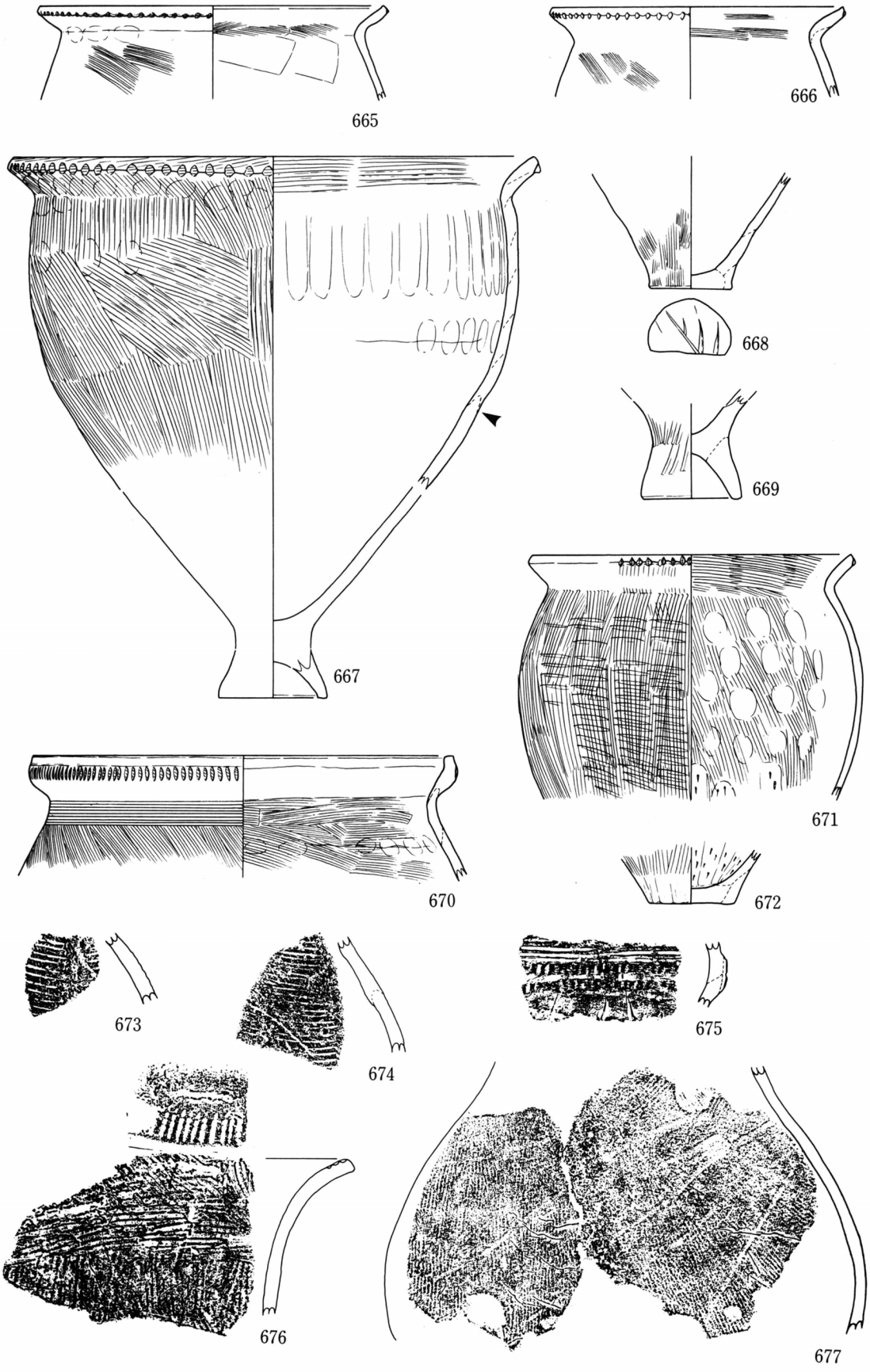
673～675は細頸壷 Aa。磨消線紋系である。器面の風化が著しいため詳細はよくわからない。

676は深鉢 Cb。口縁部内面の刺突紋は櫛状具の歯が独立せず、つながってしまっている。口縁部外面は横位条痕の上に左上がりの条痕を加えている。

下層はII－2ｂ期に属すけれども、上層第2群は微妙である。



第112図　SB32土器出土状態（1：40）



第113図　SB32出土土器

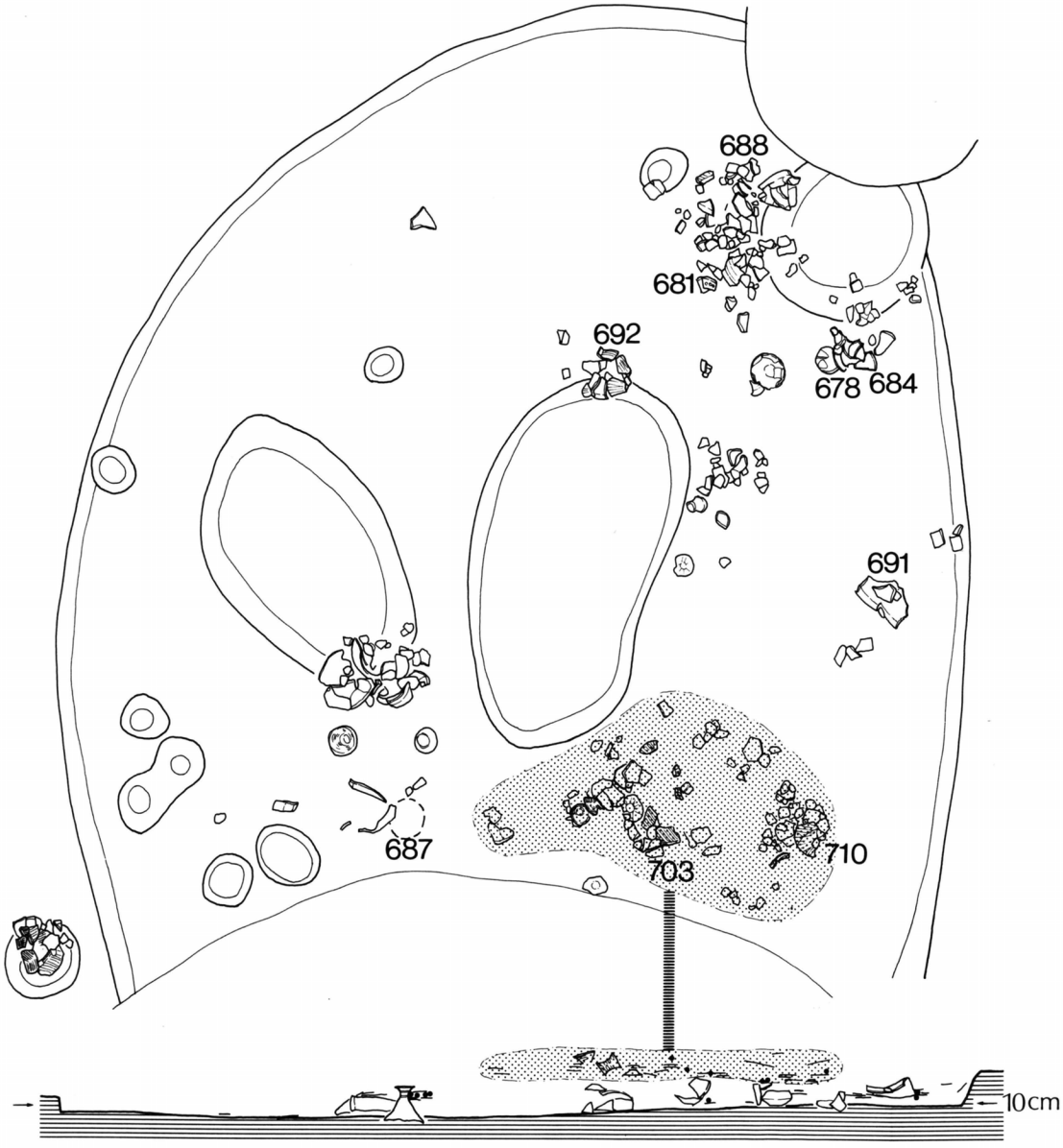
ＳＢ33　上層と下層に２分できるが、上層は「一括」としてまとまったものではない。

下層　太頸壷Ａは指頭圧痕紋系（678）と部分圧痕紋系（679•680）がある。無頸壷は細頸壷 Aa 成形第２段階で、櫛描紋 *f*（683）、櫛描紋 *e*（681•704）、刺突紋系（682）、磨消ハケメ帯系がある。

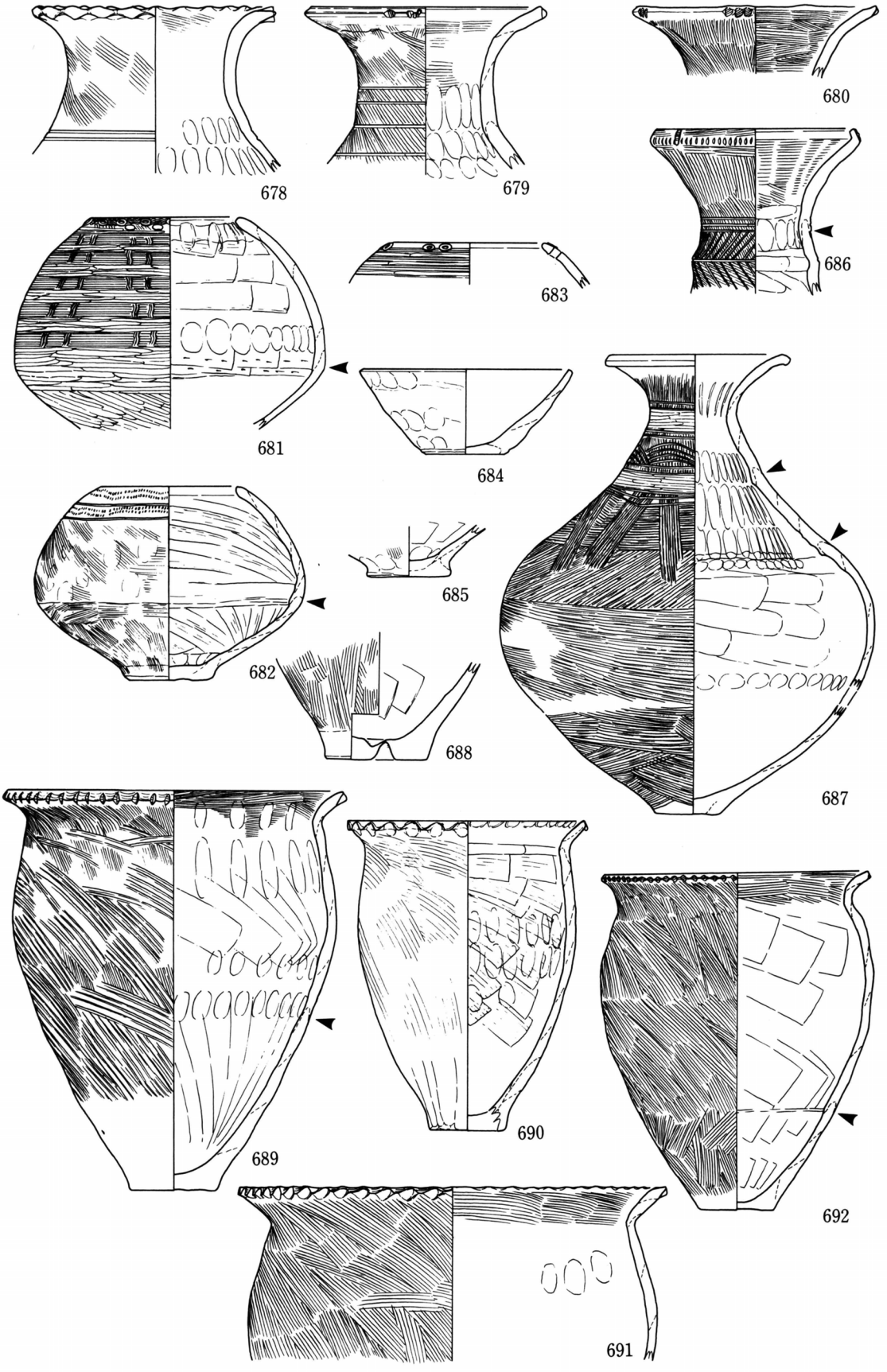
甕は Af（690・691）、Ac（689）の他に甕Ｄ系統（692）がある。

688は有孔土器の未成品である。内外面からの穿孔は位置がずれて貫通していない。

687はＢ系統細頸壷で、直線紋と体部調整は同一原体（櫛II種Ａ類）で施される。頸部に施されている沈線連弧紋の下は縦位の調整であり新しい様相である。



第114図　SB33土器出土状態（１：40）

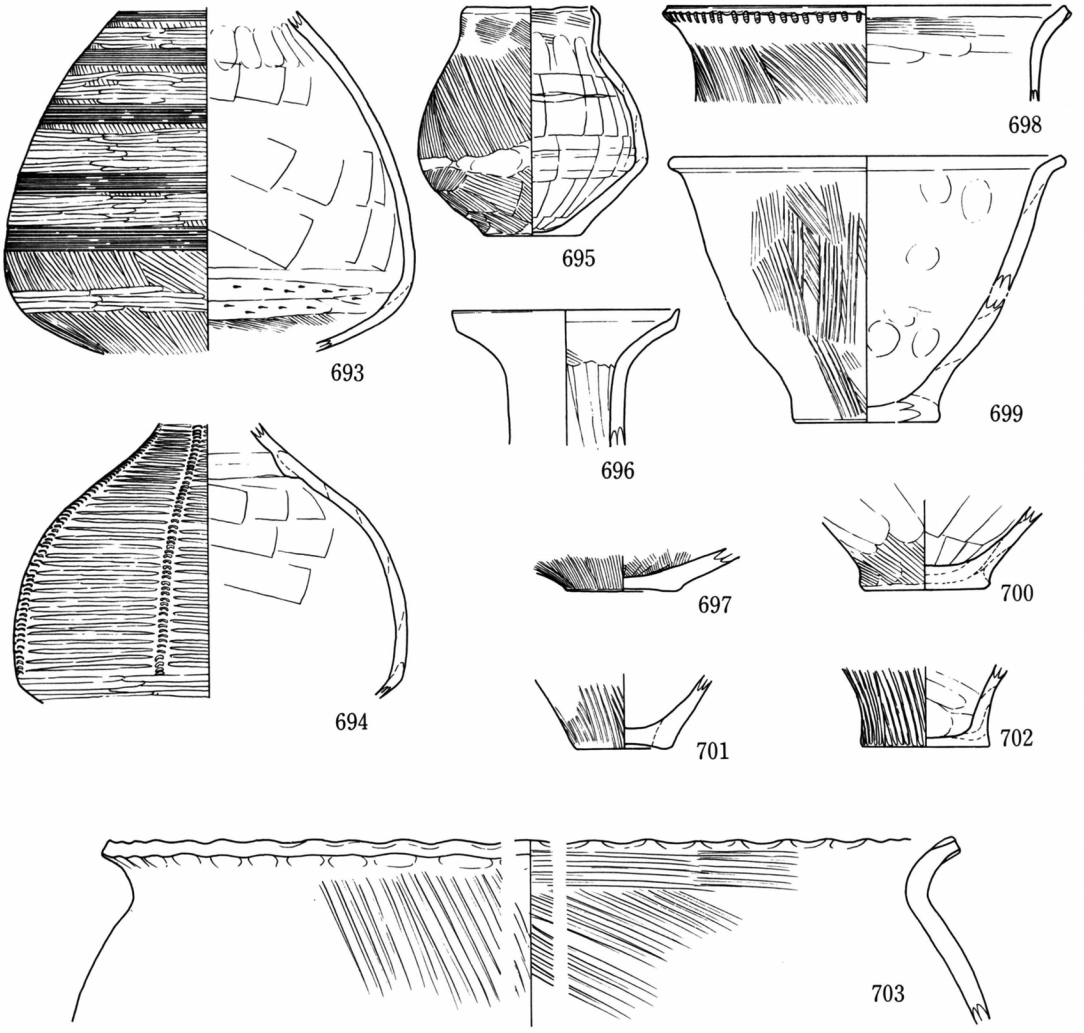


第115図　SB33出土土器　(1)

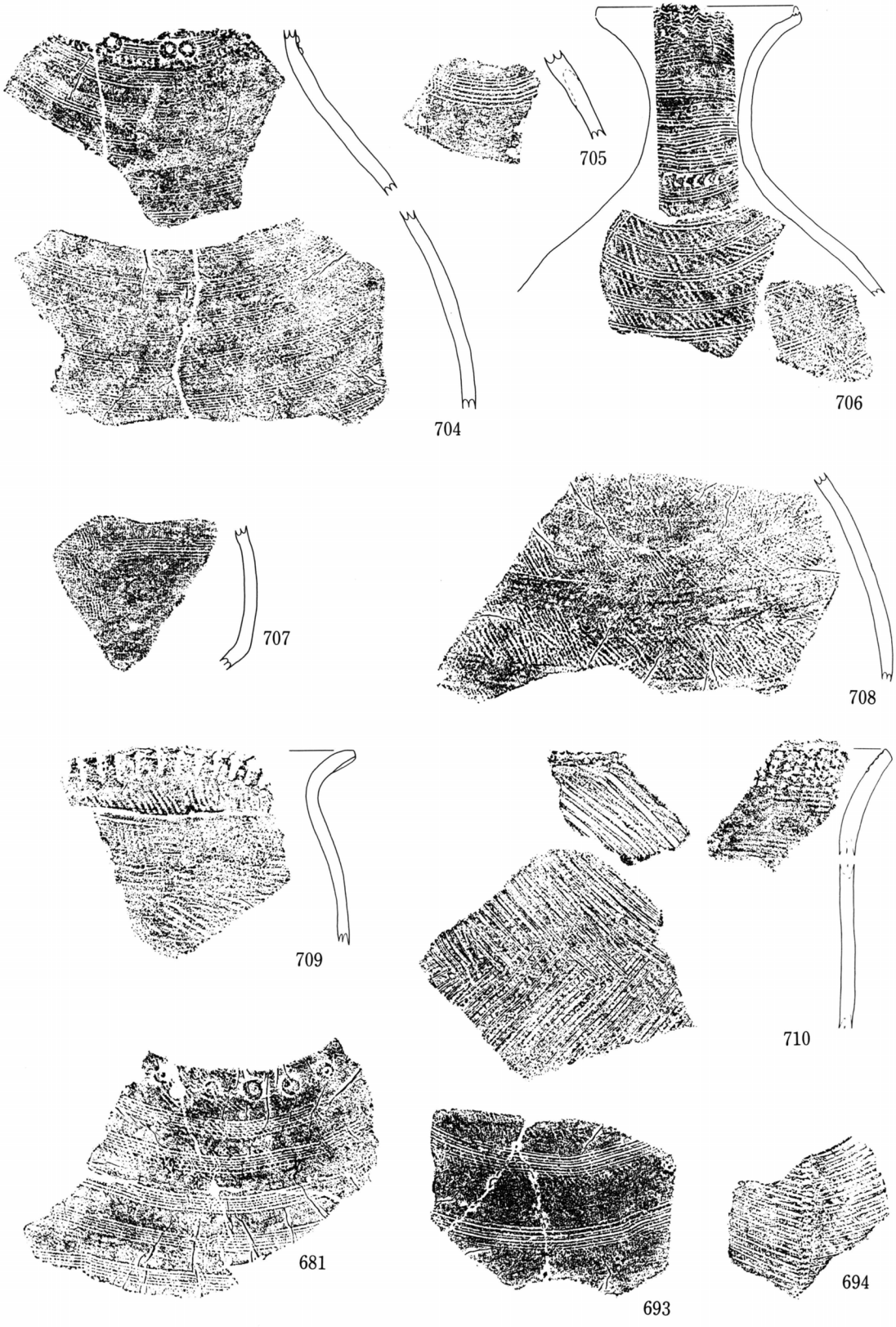
上層　壺は、櫛描紋 e 類系（693・705・706・707）、磨消線紋系（694）がある。693は櫛Ⅰ種ａ類。696は細頸壺 Aa。外面はナデられてハケメを残さない。705・707は櫛Ⅰ種ａ類単帯の櫛描直線紋→縦位波状紋→研磨という順序で施紋されるが、706体部は櫛Ⅲ種（4・4）による直線紋→縦位波状紋で施紋が終了し研磨は施されていない。口縁部や頸部外面も櫛Ⅲ種（2・2・2）による櫛描紋が施される。Ⅲ期に続く最も新しい手法である。そして、櫛描直線紋も←方向に施され、多くが→方向であるのとは異なる。

甕は703が甕 Af（指頭圧痕紋系）、709は頸部直下に断続ヨコハケメを施す。

702は深鉢 Cb で底部成形はｄ。710は深鉢 Cb の模倣品である。体部外面は櫛Ⅱ種Ａ類による横位羽状条痕を施し、口縁部内面にはハケメの上に櫛刺突紋を施す。701は上げ底状で底部成形はｂ。



第116図　SB33出土土器 (2)



第117図　SB33出土土器　(3)